

未来への伝承

第185回

土浦城櫓門の太鼓 ——人々に愛された太鼓の音——

博物館の附属展示館「土浦城東櫓」には、来館者の目をひく漆黒の太鼓が展示されています。胴部に土浦藩主土屋家の家紋「三石畳」が大きく表された太鼓で、元々は土浦城本丸の櫓門（茨城県指定史跡）の楼上に置かれていたものです。櫓門は「太鼓櫓」とも呼ばれ、城下に時を知らせるため、太鼓が打ち鳴らされてきました。江戸時代の太鼓櫓の建物と太鼓がともに現存している事例は少なく、土浦の誇るべき文化財といえます。

弘化2（1845）年のこと、土浦城下で寺子屋を営んだ沼尻墨僊は、旅の途中で立ち寄った尼崎（兵庫県尼崎市）で時刻を知らせる城の太鼓の音を耳にしました。このとき墨僊は71歳の老齢の身でしたが、伊勢参りの後に四国へ足をのびし、山陽道を経て大坂・京都をめぐる、生涯でただ一度の長い旅をしていました。旅に出るから2か月あまり、遠く離れた地で耳にした太鼓の音に、土浦を懐かしんだのでしょう。故郷を思い出したと旅日記に記しています。

明治12（1879）年、太鼓は旧藩士や町の人々により、土浦八坂神社へ神前太鼓として奉納されました。神社に伝わる奉納額には、130人以上もの名前が記されています。明治時代初期の廃城により土浦城は往時の姿を失っていましたが、町の人々は、かつて城下に鳴り響いていた太鼓に、格別の思い入れを

もっていたようです。だからこそ、土浦の鎮守八坂神社への奉納というかたちで、太鼓が残されたと推測されます。

今から10年ほど前まで、太鼓は経年による漆の剥落や革の弛みなどがみられ、必ずしも良好な状態ではありませんでした。そこで、土浦八坂神社では、保存を図るために漆の塗り替えや革の張り直しの大がかりな修復を行いました。その修復の工程で、太鼓の胴内に複数の年号や名前が墨書されていることが分かりました。このうち明和7（1770）年に記された墨書は、太鼓の製作された年を示し、江戸時代中期に浅草の職人により作られたことが初めて判明しました。また、江戸時代に8回修理が行われていたことも記録されています。これらの修理は、土浦城下で行われたと推測され、明治時代を迎えるまでのおよそ百年の間、修理を繰り返しながら大切に使われてきたのでしょう。

現在、毎年6月10日の時の記念日にあわせて、「刻の太鼓保存会」が櫓門の楼上で太鼓を打ち鳴らしています。墨僊をはじめ土浦城下の人々が日々耳にしていた太鼓の音が、長い歳月を越えて亀城公園に響き渡ります。

「土浦城櫓門の太鼓」をぜひご覧ください。



時の記念日にあわせて
太鼓を打つ様子



土浦城櫓門の太鼓
(土浦八坂神社所蔵、土浦市指定文化財)

※現在、市立博物館は改修工事のため休館中です。
土浦城東櫓は12月27日まで無料開館しています。
(東櫓開館時間：午前9時～午後4時30分
休館日：月曜日・祝日の翌平日ほか)
問 市立博物館 ☎824・2928